

## エッセイ、回顧録

### アラビスト外交官の39年 第4回

塩尻 宏（中東調査会参与、元駐リビア日本国大使）

本文はアラビア語専門の外務省員として39年を過ごした著者の波乱にみちた経験を回顧したものであり、2012年8月28日から2013年10月1日まで29回にわたって「ASAHI 中東マガジン」に掲載された回顧録を、そのまま転載したものである。最初の記載からすでに9年間が経過しているが、日本と世界を取り巻く外交関係が混迷を極めている現在、外交の舞台で活躍を目指す若者や、最近の国際関係について学びたいと考える人々にとって、何らかのヒントになれば幸いである。

#### 第4回 スーダン勤務 在留邦人の死亡事件への対応

2012年09月18日  
(約5200字)

##### 《スーダン：在留邦人の死亡事件》

在勤地で知遇を得た人たちが不慮や非業の死を遂げたことは忘れることができません。そのひとりはスーダンで技術指導に当たっていた邦人の方です。海外で邦人が亡くなった事案を担当するのはその時が初めてでしたが、その後の在外勤務中にはあちらこちらで更に4回ほど邦人の死亡事件に遭遇することになります。大抵の場合、遺体は日本に送還されます。別の機会に触れるかもしれません、エジプトでは遺族の意向により現地で荼毘に付して遺骨の形で送還したこともあります。

私が在勤していた当時、ハルツームには Sudan Steel Sheet Co.という日本とスーダンの合弁工場があり、数人の日本人が派遣されていました。その一人が亡くなられたのですが、日本の大手の製鉄会社で勤め上げたベテランの技術者で、単身赴任でした。私自身も幾度となく顔を合わせていましたが、人生経験豊かな好感の持てる人柄でした。

ある日の午前中、私が大使館で執務中に第一報が入り、驚いて駆けつけました。聞くところによると、定時に出勤して来ないので同僚が宿舎を訪ねたところ、浴室の中で倒れて死亡していたとのことでした。浴室のシャワーの水は流れたままで、ガス湯沸かし器の火は消えていたとのことで

した。外部から誰かが侵入した形跡はないので事件性はなく、入浴中に湯沸かし器が不完全燃焼となって一酸化炭素中毒により死亡し、その後に酸欠により湯沸かし器の火が消えたものと推察されました。

ナイル河畔にあるとは言え砂漠地帯にあるハルツームは極めて乾燥した気候で湿度は数パーセントです。そのため、50°Cにもなる昼間は汗が直ぐに乾燥し、額や首筋に塩分の結晶ができザラザラとした感じになり、そのままにしておくと白っぽく見えるようになります。陽が沈むと気温は多少下りますが、乾燥した気候はそのままです。シャワーを浴びる時には、すぐ近くにタオルを備え置いて濡れた身体を直ぐに拭かなければ、気化熱により強烈な寒さを感じて震え上がります。亡くなった邦人の方は、湯上り後の寒さを避けるために浴室の扉を閉め切って湯沸かし器を使い、事故にあったものと思われました。

海外で邦人が死亡した場合には、日本大使館は速やかに東京の外務省と連絡しつつ基本的に以下の事項に対応します。

- (1) 遺族への連絡と意向の確認
- (2) 現地政府(この場合スーダン政府)の官憲への通報と死亡証明書の取付け
- (3) 遺体の扱い(本邦に送還するか現地で荼毘に付すか)についての遺族の意向を確認
- (4) (遺体を本邦に送還する場合は)現地の医師に依頼して防腐処理を施し、同時に本邦までのフライト手配(航空会社によっては引受けを逡巡する場合がある)
- (5) 棺を調達し、現地税官吏の立会いのもとで納棺・封印
- (6) 発送当日の通関手続きと航空機への積込み確認

以上は邦人保護業務として日本大使館が最低限対応する事項です。当時の在スーダン日本国大使館は大使、参事官に書記官が2人と現地職員が5~6人の最小規模公館でしたので、この様なことがあれば全館あげて対応しました。

私はアラビア語ができる唯一の館員でしたので、スーダン当局との折衝や手続きなどに現地スタッフと共に奔走しました。遠く離れたスーダンで不慮の死を遂げられた日本人に対して、同じ日本人としてもできる限り心のこもった対応をしたいと考えました。大使館の中で最も新米の書記官でしたが、緊張して戸惑いながらも精一杯対応しました。

故人の同僚や関係者と相談して、日本に向けて遺体を送り出す前に現地でお別れ会を行うことになりました。同僚の代表の方の宿舎兼事務所のサロンに遺体を安置してささやかな祭壇を作り、関係者が靈前に集いました。供花にする花があれば良いと考えたのですが、当時のハルツームには花を売っている店は一軒もありませんでした。そこで、現地職員の協力を得て花壇のありそうな庭があるスーダン人の邸宅を探し、その主人を訪ねて事情を話しました。庭内にあるものは何でも提供するとの快諾を得ましたが、厳しい気候のハルツームでは庭にある花は僅かばかりのカンナで殆が葉物でした。何とか精一杯の供花をしつらえて個人のご冥福を祈りながら靈前に供えたことを思い出します。

## 《スーダン：外交団との交流》

スーダンは1967年6月の第3次中東戦争勃発と同時に米国と断交しました。1971年夏のクーデター未遂を乗り越えて容共派を排除したヌメイリ政権は、ソ連・東欧諸国との関係が冷却化する一方、欧米諸国との関係改善に向かいました。1971年12月には西ドイツ、英国、1972年7月には米国との外交関係が再開されました。断交期間中、在ハルツームの米国大使館は表向き米国利益代表部の看板で、ムーア(Mr. George Curtis Moore)参事官を責任者とするアメリカ人外交官が駐在していました。私が赴任したのはその頃です。

私は着任後の表敬訪問の一環としてムーア参事官を訪れましたが、彼の事務所は表向き大使館ではありませんが、訪ねてみると日本の大使館より遙かに設備の整った建物でした。また、海外に駐在するアメリカ人外交官は基本的に国内と同程度の生活環境が保障されている由で、日本との違いを実感しました。

中東・アラブ世界での経験豊かなベテラン外交官のムーア参事官は、屈託がなく好感の持てる人柄で、私がイメージする善良なアメリカ人の典型でした。アラブの専門家を目指すアラビストの新米外交官であった私にも懇切に対応してくれましたので、お互いに意気投合しました。ベテランの中東・アラブ専門家として、幾度となく適切な助言や解説をしてもらったことを思い出します。米国とスーダンの関係改善の高まりの中で意気軒昂に活躍していたその頃のムーア参事官の存在を心強く感じていました。

## 《スーダン：アメリカ人外交官の殉職》

私がスーダンから帰国して1年も経たないうちに、親交のあったあのアメリカ人外交官のムーア参事官が非業の死を遂げたことはもう一つの忘れられない残念な出来事でした。40年も前のことですが、思い出すと今でも心が痛みます。

気候的にも厳しい異文化社会で、かつ、経済的にも疲弊していたハルツームでは、そこに住む外国人にとってはこれといった娯楽施設などはありませんでした。そのため、外交官の間ではディナーやレセプションなどの社交の機会は息抜きや気晴らしの意味もあり、社交行事は常に盛況でした。1973年3月にパレスチナ・ゲリラが襲撃したサウジアラビア大使館のレセプションにも多くの外交官が出席していたものと想像されます。その事件でムーア参事官らが犠牲となりましたが、私もまだスーダンに在勤していたならば巻き込まれていたかもしれません。

私は2年半近くの在スーダン大使館勤務を終えて1972年の春に東京に戻りました。その年の7月には米国とスーダンが外交関係を再開したとの記事を見て、ムーア参事官の活躍振りを懐かしく思い出していました。それから約7ヵ月後の1973年3月にハルツームでパレスチナ・ゲリラ事件が起きたとの報道があり、犠牲者の中に彼の名前を目にした時には愕然として胸が詰まる思いがしました。東京に戻ってから1年後のことでしたが、ムーア参事官との交流はつい数日前のように思い出されました。

当時の報道や資料によれば、1973年3月1日の夕刻にハルツームのサウジアラビア大使公邸で新任のノエル(Mr. Cleo A. Noel Jr.)米国大使の歓迎と離任を控えたムーア参事官の送別のために催されたレセプションの最中に8人のパレスチナ・ゲリラ(Black September Group)が押し入りました。日本大使館の上司であった参事官宅の真向いにあったその場所は私も良く覚えています。彼らは、歓談中であったレセプション出席者を人質に取って、24時間以内にサー・ハン・B・サー・ハン(ロバート・ケネディ上院議員暗殺犯)、バーダー・マインホフ(西ドイツ都市ゲリラ)、アブ・ダウード(ファタハ指導者)らを釈放するよう要求しました。

交渉の結果、ノエル大使、ムーア参事官、エイド(Mr. Guy Eid)ベルギー臨時代理大使ら6名以外の人質を解放し、関係国との交渉が更に続けられました。その交渉が不調に終わったゲリラ側は、翌3月2日夜にノエル大使、ムーア参事官、エイド・ベルギー臨時代理大使の3人を射殺しました。ゲリラたちは翌3月4日朝に他の人質を解放してスーダン当局に投降しました。

事件当時スーダンに居た同僚から聞いた話では、ゲリラ側は米国務省と電話で交渉し、状況説明のためにノエル大使やムーア参事官も電話口で国務省の担当者と話したようです。米国側はテ



リストの要求には応じないと立場を貫き、電話口のムーア参事官らに対して“Good luck”との言葉を残して交渉を打ち切ったとのことです。その後、テロリストたちは3人の人質を射殺しました。米国の断固とした対応もある意味では、犠牲者や殉職者に対する手厚い処遇に裏打ちされたものかもしれません。

米国の外交官が職務中に殉職した場合には、残された家族については政府がその生活の面倒を充分に見る制度が確立していると聞いています。わが国の外交官が在外勤務中に殉職した場合にも、もちろん規定の手当や見舞金が遺族に支払われることになっています。しかし、残された家族にとってその額は決して充分とは言えないようで、支援を求めるために義捐金を募る回章が幾度か回ってきたのを覚えています。また、外務省の玄関には殉職した外務省職員の顕彰碑が置かれていますが、それも同僚職員の寄付によって作られたものです。

## 《スーダンから東京へ》

今から40数年前の2年6ヶ月のスーダン在勤中には、クーデター騒ぎ、在留邦人の事故死などを体験し、あわただしい日々を過ごしました。私自身の盲腸手術、2人の息子の誕生などもありました。当時、スーダンで邦人が開腹手術を受けたのも出産したのも初めてと言われたのを記憶しています。

スーダン在勤が2年過ぎた1972年12月、唐突に本省の担当課長から非公式に「君は近く本省に転勤になる予定」との電話連絡を受けました。「妻が2ヵ月後に出産を控えているので、発令時期をしばらく延期して欲しい」旨訴えたところ、先方は「既に手続きが進んでいるので予定どおり発令する。ただし、発令後に事情を説明すれば帰国時期の延期が認められるよう取り計らう」との回答を得ました。

数日後に、外務大臣から大使あてに「塩尻に帰朝を命じる」との電報が届きました。私から大使に上記の事情を説明すると、「大臣の命令に背くことはできないので、予定の期間内(当時は発令後30日以内)に帰国するように」との指示を受けました。思いがけない大使の対応に驚いて、「妻の妊娠は既に飛行機への搭乗が認められない時期になっている。本省は、大使から大臣あてに事情を説明して正式な帰国時期の延期願いがあれば、認める用意がある」と聞いている旨縷々説明しましたが、大使からは「大臣の命令には背けない。飛行機の中で出産した例もあることを知っている」などのお言葉で、納得が得られませんでした。

大使のご不興を買いましたが、本省の担当課長とも非公式に連絡しつつ、大事を取って妻の出産後の適当な時期に帰国することとしました。その後の例は承知ていませんが、当時、妻は日本人として初めてスーダンで出産しました。1972年2月初旬に無事次男を出産した妻の体力回復を待って4月下旬に帰国し、私は中近東アフリカ局中近東課に配属されました。

なお、次男の出生地が日本人としては珍しくスーザン国ハルツーム市と登録されたことについては、本人も外国、しかも珍しくアフリカ大陸にあるアラブの国で生活したことがある証として肯定的に受け取っていたようです。20 数年後に米国でヘリコプター操縦士として働き始めた彼は、就労ビザの取得手続きなどで思いがけず自分の出生地が問題になる事態に遭遇しました。スーザンは 1993 年から米国務省のテロ支援国家リストに掲げられていましたので、関係当局の担当者が日本国籍の次男の出生地がスーザンであることについて執拗に説明を求めるのは出生地主義をとる米国においては当然なことでした。その後、米国で 2001 年 9 月 11 日に起きた同時多発テロ事件の頃、次男は運悪くちょうど就労ビザの更新時期を控えていました。外国人の就労についての米国の法律や規則が一層厳格化したことによって彼の手続きは不首尾に終わり、現在は日本の航空会社で救急救命ヘリコプター(ドクターヘリ)の操縦士として働いています。(続く)